

【昔男】むかしをとこ

「昔、男ありけり。…」で始まる『伊勢物語』は現存する日本最古の物語として長く日本人に親しまれてきました。

平安時代前期成立のこの物語は流布本(天福本)で125段の短編から成り、歌は109首を数えます。この男のモデルが在原業平であることはご承知のとおりです。

業平は天長二～元慶四(825-880)四月五没。平安前期の貴族。阿保親王の五男。母は伊都内親王、兄は行平。六歌仙、三十六歌仙の一人。伝説的色男としてあまりにも有名です。

彼が活躍した時代はまだ唐の文化を求めて遣唐使が派遣されていた時代で、国風文化が開花する以前の時代でした。

仏教界では最澄・空海に続く円仁・円珍などいわゆる入唐八家の後期の僧が活躍していた時代です。

この時代はいわば公文学は漢詩・私文学は和歌の時代で、勅撰集は未だ漢詩集に限られていました。和歌が勅撰集となるのは延喜五年(905)の『古今和歌集』を待たなければなりません。

業平の時代の和歌は万葉の時代に主流であった長歌を離れ短歌が主流となっていました。貴族たちにとって恋の想いを伝えるにも・感傷に耽るにも・「君が代」の詞のように君主に祝辞を述べるにも和歌はなくてはならないものでありました。

恋をするには和歌が必修である時代、業平のような歌の上手がもてたわけです。

『伊勢物語』に業平の名は登場しませんが彼の実話にはほぼ近い恋話が多く含まれ、六五段には「在原なりける男」とあるところから昔男は業平であることは間違いなさそうです。

『伊勢物語』の成立状況は専門家の間でもよくわからないようで、そもそもこの物語のタイトルが何故『伊勢物語』というのかも諸説あるものの未だ不明です。

『伊勢物語』は長きに渡り多くの絵画の画題・工芸品の意匠となってきました。こうした作品を伊勢絵といい、『源氏物語』から取材した源氏絵と共にやまと絵を代表する画題といえましょう。根津美術館の尾形光琳作〈燕子花図〉も『伊勢物語』九段「東下り」の八橋の場面からの創意であることは確かなことです。

<http://www.nezu-muse.or.jp/syuuzou/kaiga/10301.html>

九段だけを採り上げても茶道具の意匠になりやすい画題は、燕子花のほか、八橋

・唐衣・蔦・笈。結び文・富士山・隅田川・都鳥・小船・渡りなど豊富です。

このほか、井筒・住吉・武蔵鐙・布引の滝・白露・烏帽子・芥河・葦辺など、皆様ご自慢のお道具の中に伊勢絵からの意匠、あるいは銘があるのではないのでしょうか。

関連する銘「唐衣」につきましては既にご参考ください。「折々の銘 21・22」

私は「昔男」という銘の茶杓・茶入に何度か出会っています。

中でも20年ほど前、京都の道具屋さんで拝見した淡々斎銘「昔男」瀬戸金華山窯茶入は今でも忘れることのできないすばらしい肩衝でした。欲しいと思った最初の本格的茶入だったように思います。とても手の出せない額でしたので拝んで帰ったものです。

何方かお心当たりの茶入をお持ちの方がいらっしゃいましたらお招き戴ければ幸いです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~